ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2006年3月31日
■連絡先　藤川博樹
〒115-0045
北区赤羽1-48-3-203
tel03-5249-5797　fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.292

3月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5枚（2000字）
小説：10枚（4000字）目安

■締め切り
4月14日（金）

■年会費
1200円（年）
切手80円×15枚
郵便振替：東京00170-1-18290

◆ユジノサハリンスクの町外れにある第二次世界大戦勝利記念公園のモニュメント。本物のT-34中戦車が飾ってある。ドイツ軍の主力四号戦車を圧倒する性能で、ソ連の勝利を導いた原動力だった。戦後も中東などで長く実践兵器として使われていたそうだ。
それにしても本物を飾ってしまうとは。
2003年8月

◆春を告げるスプリングエフェメラルと呼ばれる植物たちの一つでアズマイチゲという花があり、近所の日連神社にも咲く。アズマイチゲは関東での自生地が減少していて、日連神社近辺は観察にはもってこいの場所だ。この種類は写真撮影が難しく、第一に風待ちしなければならない。この季節、朝夕風が強く、長時間露光で撮影する作風のひとは苦労する。

また、アズマイチゲの近縁種でキクザキイチゲというのがある。アズマイチゲよりひとまわりおおきく、姿が優美な感じがする。発生は4月にずれこむ。（この花の自生地をみつけた。ご覧になりたい方は連絡を）図書館で調べてみたが、近畿以西にユキワリイチゲという種類があるらしい。わたしがみつけているキクザキイチゲは通常の淡い紫ではなく白い花で、花びらの数が多く、長い。ひょっとするとこれに近縁なのかもしれないし、わたしの思い違いで単なる白花型であるのかもしれない。いずれにしても花のうつくしさ、可憐さは例えようがない。ところで、青田の山はコナラが大量に伐採され、斜面が荒らされてしまった。ハルリンドウの宝石のようなきらめきに今年は出会えるかどうか（一株に20以上の花をつけた株もあった）、フデリンドウ、アマナ、ホタルカズラ、イチヤクソウ、ユリワサビ、サイハイラン……どれひとつとっても貴重で、春の出会いの楽しみだったのに。なすすべなく、彼ら彼女らの無事を祈っているだけだ。

◆先日、かみさんが蓮の植え替えをやっていた。泥だらけになっている。足元をみると、わたしの長靴をはいている。彼女には年明けに上等の長靴を買ったばかりだが…はて？
「R子さん、なんで自分の長靴はかないの？」
かみさんはスコップを片手にイタズラをみつけられた子供のような表情でいった。
「だって、汚れるんだもん」
青田もすぐに爛漫の春となる。（雅）

おれたちの村 ⑭

蒲原ユミ子

一四　お屋敷で

２月に入り日脚がのびてきた。

スキー大会は二週間後にせまってきた。

陽平と泉はスキー練習を終え、あったかいおにぎりも食べ、満足して教室へもどってきた。

二人がランドセルをせおい、学童にいる弟と妹を連れに教室を出た時だ。

「ちょっと待って！」

と、声をかけられた。ふり向くと、桜田先生が息をはずませて廊下を走ってきた。

「陽平さん！教えてもらいたいことがあるの。帰るところなのに、悪いけれど」

「いいよ」

陽平にとって、少しも悪くない。かえってうれしいくらいだ。

桜田先生は大きな図鑑を持って教室に入った。二人も続いた。先生は電気をつけ、教室を明るくしてから図鑑を開いた。

「この前スキーの練習中にきれいな雪林でみた鳥のこと、おぼえている？」

陽平は軽くうなずいた。あいつとは三回会っている。忘れろと言われてに忘れることなんかできないくらいだ。

桜田先生は猛禽類のページを広げて、陽平に聞いた。

「どの鳥だと思う？」

そこには鋭いまなざしと鉤型のくちばしのハヤブサや、翼を広げ大空を勇壮に飛んでいるオオワシなどがいた。けれどあいつとはちがう。陽平はページをめくった。いた！

「こいつだよ！」

『ノスリ』と書かれている。翼を広げた胸毛は白く柔らかい。ハヤブサほどはっきりした輪かくの尾羽でもない。桜田先生は真剣に問い返した。

「どうしてそれだと思うの？

陽平は戸籍の両肩の骨も要求さした。

「おれ、この丸いもようが気に入ってるもの」

桜田先生は大きくうなずいた。

「わたしもそれだと思うの。目がちょっと優しかったし、ずっと前、北アルプスで見たハヤブサとは違ったもの」

そばで、泉が感心した。

「先生、鳥にくわしいね。ぼくはカラスとスズメしかわかんない」

桜田先生はちょっと笑ってからきびしい顔をした。

「ノスリはね、絶滅危惧種に指定されているの」

陽平は首をかしげた。

「絶滅……なんだって？」

「絶・滅・危・惧・種。だんだん滅びていく鳥のことよ」

「フーン」

「だからそういう鳥を保護するための法律ができているの」

陽平は思い出した。

「でもあいつがいる山はゴルフ場になってしまうからなあ」

すると桜田先生は目を輝かせて二人にささやいた。

「これから話すことは、ほかの人には言わないって約束してくれる？」

陽平はときどきしてきた。桜田先生と泉の三人だけの秘密が持てるぞ！

しっかりとうなずいた二人に桜田先生は話した。

「保護鳥がいる場合、ゴルフ場とかを開発してはいけない法律があるの。だから私、これから村の教育委員会に相談しに行こうと思うの」

「へえ！」

陽平と泉は桜田先生をしげしげと見た。

「先生、やるじゃん！」と泉が笑っ

た。
　泉が笑うと、目と眉がたれ下がり芸人のようなひょうきんな顔になる。この顔を見るたび陽平は（こいつと友だちになれてよかった）としみじみ思う。
それから、はたと気づいた。
「じゃあ、山はもとのまんまでいられるんだ！」
　桜田先生は口に人差し指をあて、シーッと言った。
「まだまだわからないわ。ちゃんと調べてみないと。だからこのことは他人にはヒミツよ」
二人はかしこくうなずいた。

学校の門を出てから、陽平は泉に言った。
「きょう、ちょっとより道したいんだ」
　陽平は急にムサシに会いたくなったんだ。初めて『ノスリ』のあいつに会ったのはムサシといっしょの時だったから。
　泉は軽く
「オッケー」
と言ってからひとり言になった。
「どうせお母さんは帰ってくるのがおそいから」
　それは陽平も同じだ。
　二人のあとをだいぶおくれてケントと泉の妹、ミチルがついてくる。
陽平がどなった。
「早く来いよ！きょうは山村のじいさまの家によっていくからな」
　すると、急にケントはゲンキンに走っておいついてきた。ミチルも雪道を必死で急ぐ。
　除雪した雪が道の両側に四メートルくらいの壁になっている。山村のじいさまの家は雪の階段を登り、除雪されていない雪道を行く。なれた道だけど、陽平はスキーの選手になってからじいさまの家に上がるのは初めてである。だから、ムサシに会うのも久しぶりだ。陽平の気がせいた。
（あいつ、さびしがっているだろうなあ。なりは大きいくせに、甘えん坊なんだから）
　四人はお屋敷の前の石橋までやってきた。陽平は石橋から玄関まで続く道を見て（あれ？）と思った。いつもより道がせまい。前はじいさまが雪かきして広く開けていた。陽平は（今年はとくに大雪だったせいかな？）と思った。
　陽平は鋭く口笛を吹いた。
　フィッー！
　すると、大屋根の方から雪をひょいひょいかきわけながらムサシがあらわれた。子牛のように大きく精悍な黒い犬を見て泉とミチルはぎょっとして後ずさった。陽平はよゆうで二人に教えた。
「ムサシはこわそうだけど、すごくかしこい犬なんだ。やたらにほえないし、ぜったいにかまないから」
　そう言われて二人はほっとしたが、陽平の一メートルうしろにはなれて固まっている。ムサシは陽平にたどりつくと、後ろ足で立ち上がり陽平の顔をぺろぺろなめ始めた。陽平は
「顔はだめだよ」
と言いながら、ムサシの頭や耳をしきりになでてやった。
　陽平はムサシが満足するまでなでてやってから泉をふり返った。
「ちょっとさわってやりなよ。ムサシよろこぶよ」
　けれど泉は手をふった。
「きょうはえんりょしとくよ」
　ミチルもずずっとケントの後ろにかくれた。陽平はざんねんそうに言った。
「じゃあ、ちょっとじいさまにあいさつして帰ろうかな」
　陽平は玄関を開けた。重い引き戸だが、いつも鍵はかかっていない。りっぱな高床の奥に広間がひっそりしている。
「こんにちわ」
　少し待ったが返事はない。もっと大きく叫んだ。
「こんにちわ、陽平です！」
　反応がない。すると、外から玄関をのぞいていたムサシが吠え出した。
ウォオーーン、ウォオーー
ムサシの目が不安そうである。
ウォオーーン、ウォオオ～～
陽平と泉は目を合わせた。泉が言った。
「上がってみようぜ」
　陽平は長靴を放りすてるようにぬぎ、文化財のような立派なお屋敷に上がった。そして、前にケントが雪穴にすべり落ち、甘酒をもらった部屋に走った。じいさまはいない。となりの客間にも、そのとなりの書斎にも姿が見あたらない。（つづく）

混沌市凡日録　十三

百鳥飛び千蝶舞う

蒲原直樹

澄田一家が足賀沼にほど近い混沌市兜蟹新田の新邸に戻ってきたのは去年の秋だった。新築計画の全てを考えた家長の高道は得意だった。イギリス大使館を思わせる白亜の豪邸は中も外も贅を尽くした家具家財で満たされていた。四十畳のリビングに二十畳の和室、子どもたち一人一人に与えられる大きな個室。それから家長高道自身の三面を高い本棚で囲んだ書斎。どれも家族を驚かすのに十分のはずだった。

中でも厨房は定番の対面式システムキッチン・アイランド式チンクで、妻の妙子は躍り上がって喜んだ。一方、すでに高校生になっている長男や中学生の長女はさほど喜ばなかった。自分たちはもう独立する時期でどうでもよいが、両親と祖父母の老後のバックグラウンドが出来てよかった、くらいの反応だった。しかし日曜日になるとクラスメートをさそって「引越しパーティ」を催していたところを見ると、まんざらでもなかったようだ。

新築早々はいいことばかりで一家には楽しい時間が過ぎた。高道は広い庭にしつらえた築山と、それを取り巻くうっそうとした木々を好ましく思った。彼は書斎から緑の庭を眺め、そこに集まる小鳥の歌を聞いて深い満足を覚えるのだった。

風向きが変わったのは三男の小学五年生・隆道が異常を訴えだしてからだ。目が赤くなる、咳が停まらない、そして皮膚一面に吹き出物が出た。

「なにかのアレルギーかしら」

妙子はすぐさま医者に連れて行ったが、原因は分からなかった。抗アレルギー剤・咳止め・点眼薬だけもらった。しかし隆道の咳はひどくなり、夜中にも激しく咳き込み、呼吸困難を起こすようになった。かきむしる手足は血まみれになり、かさぶたが何重にもおおった。高道も妙子も頭を抱えた。

「夜中までヒイヒイ泣かれたら困っちゃう、あたし受験なんだからね」

そう言っていた小学六年生の次女・涼子だったが、ある日、隆道とまったく同じような咳をするようになった。その症状はあっという間に激化し、目は真っ赤になり、爪ははがれ、粘膜からは出血し、隆道以上の哀れな姿になった。

二人の子どもがひどいことになって母の妙子はようやく本気になった。生協のつてで自然食品のマーケットを見つけ、そこから高い無添加食品を取り寄せた。アレルギー因子を持つと疑われる豚肉・卵・牛乳・蕎麦・小麦粉は食卓から追放され、米も有機栽培のものだけになった。それで子どもたちの症状もいくらか改善された。

やれやれ、と一安心したのも束の間、今度は長男・盛道と次男・弘道が発病した。彼らの症状は吐気、目眩と、わけもなく興奮したり落ち込んだりする精神錯乱だった。こちらは食べ物を換えればよくなるという性質のものではなかった。高道と妙子はまたしても頭を抱えた。

「この際、うちの問題を根こそぎ洗い出してみよう」

高道はそう提案し、業者に依頼して豪邸を調査させた。その結果は恐ろしいものだった。

「ホルムアルデヒド、ピレスロイドその他の有害化学物質の濃度が基準値の倍近い」

このままでは居住者の健康被害は悪化する一方である、という結論だった。

対策として、とりあえず小さい子どもたちは即時退去させる、原因の一つである壁紙はすべて張り替える、強力な換気装置を取り付けて二十四時間作動させる、などが提案された。高道はすべてを実行した。ついでに家の建築施工業者に対する損害賠償請求手続きも行った。業者は飛んで来て、平謝りした。しかし「下請けが指導に反して」という言葉を繰り返し、自分たちの直接加害責任は認めなかった。

小学生の二人はしばらく母方の祖父母の家に預けられ、彼らは隣県の山の中の学校に転校せざるをえなかった。涼子の私立中学受験もお預けになり、彼女はしばらく泣き続けた。

壁紙交換で一息ついた時、高道自身の体調に異常が出た。それは極端な躁鬱症状で、異様に気持ちが昂ぶって眠ることも出来なくなったと思

うと、次の日は理由もなく落ち込み涙が停まらなくなるのだった。彼は今度は国立衛生科学研究所に調査を依頼した。

研究所の調査官は床板をはがし、天井裏に登って徹底的に有害物質を捜索した。その結果、またも驚くべき結果が出た。防虫剤・防腐剤にダイオキシンを含む溶剤が使われ、使用禁止のディルドリンを含むシートが敷き詰められていた。「これでは熊でも死ぬ」調査官は吐き捨てた。それでも高道はこの家を捨てることが出来ず、シートを撤去して天井裏・床下を洗浄するだけで棲み続ける方向を選んだ。当然その経費は業者が負担した。不安は残ったが、それで家の怪現象は消え去るはずだった。しかし洗浄作業の数日後、長女の香織が異様な言動をし始めた。

「部屋の中に虫がいる、窓の外に鳥がやってくる」

その鳥たちは真夜中にも鳴き騒いで眠れないと言うのだ。向かいの夫婦の寝室からはそんな気配は感じられなかった。試しに高道が香織の部屋で眠ってみたが、そんな騒ぎはなにも起きなかった。「幻覚だよ」と言ってみたものの、その幻覚の原因が問題だった。

兜蟹新田は湿地帯で、宅地にするために大規模な埋め立てが行われた。その土は栄養価の低い赤土だったので、家の建替えに際して庭師は大量の腐葉土を入れた。高道はそれが怪しいとにらみ、土のサンプルを衛生科学研究所に送った。その結果、またまた驚くべき事実が明らかになった。腐葉土は合成物で、その原料の中に化学処理された穀物・蛋白質が混じり、幻覚作用を起こすリゼルギン酸と生成物のムスカリン、コルヒチンが検出されたのだ。高道はただちに庭師を呼び、庭土の総撤去を命じた。庭木は全て運び去られ、緑豊かな森だった庭は冬の荒野に変わった。

試練は終わったかに見えた。家族は大きな犠牲を払いつつも、また平穏な暮らしを取り戻した。下の子たちは離れたままだったが、祖父母と夫婦、三人の子どもたちは家に残っている。完全とは言えないにしろ、有害な部分を切り捨てて豪邸は残った。庭木と山水がなくなったのは寂しいが、ものの数ではなかった。ニ割増しの賠償金で別の業者にまた作らせればいいのだ。高道はダイニングの隣りのバーに降りて一人で祝杯をあげた。

寝室に戻り、パジャマに着替えようとしてボタンがずれ、高道は少し飲みすぎたかと反省した。心地よい眠りを予感してキングサイズベッドに倒れこもうとしたとき、どこかで鳥の羽ばたきが聞こえた。彼は反射的に窓の方を見た。レースのカーテンの隙間に青白い鳥が浮かんでいた。その鳥はガラスを摺り抜け、部屋の中に入って来た。鳩のような、あるいは鷺のようなその鳥は羽音も高く間接照明の天井をぐるぐると飛び回った。窓からは次々と鳥が入り込み、たちまち天井は鳥の群で一杯になった。

「やめろーッ、出て行けーッ！」

高道がそう叫ぶと、隣りのクイーンサイズベッドに寝ていた妙子が起き上がって言った。

「お父さん、何を夜中に騒いでいるんですか、なにもいませんよ」

その声に振り返ると、寝室はたしかにもとのままだった。

「あれ……でも、そこに蝶々が……」

妻が指差すベッドの上の壁を見ると、大きな黄揚羽がとまっていた。それは細胞分裂をするように増え、四匹になり八匹になり、ついには壁の全面を覆うほどになった。それは壁からあふれ、ゆったりと空間を漂い始めた。寝室の暗い照明の中に鱗粉がキラキラ輝き、何百匹という蝶々の群がゆっくりと渦巻いた。鱗粉に咳き込んで息が詰まり、高道は床に倒れた。

「家具が問題だったらしい」見舞いに来た祖父が言った。

混沌市を遠く離れた福島県北部・裏磐梯の療養所で、高道は父親の声をうつろに聞いた。

「ウェールズ産輸入家具の、薫蒸がいいかげんだった。それで内部にカビが繁殖して、アルカロイド系の毒を発生させたんだとか……高道、おまえも運が悪い」

混沌市兜蟹新田の豪邸にはもう老いた両親しか残っていない。一大決心し、借金をして新築した家が一家離散の原因になったのだ。高道に悔いても悔い足りない、やるせない思いが残った。

（老親が元気なのは何故だろう？…彼らの若い頃には添加物や抗生物質がなかったから、抗体が存在しないのだろうか？……だとしたら、この国の将来は……）

高道はやるせない気持ちの中でそう考えた。

下関（二）

中井　豊

次に、長府毛利藩五万石の城下町を見学するため、長府へ向かい、一一時前に到着した。ガイドさんに引率され、長府観光会館前から功山寺を目指して歩く。「長府侍町」という整然とした町並みが壇具川に沿って伸びる。功山寺の石段の脇には《高杉晋作回天義挙之所》という石碑があって、門柱には《第十九番中国観音霊場金山功山寺》とある。その奥に二重造りの巨大な山門が聳え、仏殿・本堂へと通じる。ここの墓所には藩祖毛利秀元以下が眠る。

本堂の右に高杉晋作の騎馬像が立っている。一九六四年（元治1）、高杉たちは三条実美ら五卿を奉じて八十名で萩（長州）藩新地会所を急襲。藩論を反幕へと動かし、後の薩長同盟の先駆けとなったらしい。

さらに行くと、明治期（一九〇三年）に完成した長府毛利邸の前へ出る。邸内は広々とした床の間付きの各部屋と池泉回遊式の庭園が贅沢で当時の趣があった。乃木神社で乃木希典の異常な精神を探りたい気もしたが、あまり愉快な人物ではないので、行くのは止した。

昼食の《フク・フルコース》は、さしたるものではなかった（下関ではフグをフクという）。一万円のツアーだから当然――否、それにしては上等だったと言うべきかも知れない。松原さんの言うように、大阪南港―新門司港を普通に往復すると、それだけで船賃が約一万七千円かかる。しかも、方々を探訪した上、関門海峡を一望できる天然ラドン温泉に入れるのである。昼食後、近くの店で今夜の焼酎を買い込み、この露天風呂から海を眺めた。

歴史探訪の最後は赤間神宮だった。一四時一五分に到着すると、神宮の水天門は朱と白の竜宮造り水天門が目に鮮やかだ。先ず、「春帆楼」横の日清講和条約締結記念館を見学した。フグ食用禁止令は伊藤博文が解いた。その公許第一号店が「春帆楼」だそうだ。ここから細道を辿って赤間神宮境内に入る。「耳なし芳一」にゆかりのお堂もあるという。

バスで移動し、いよいよ楽しみな唐戸市場だ。この市場を知ったのは、土産物店でバスガイドのお姉さんが、「ここより、後で行く唐戸市場の方がいいですよ」と耳打ちしてくれたからだ。入ると、魚市場の威勢よさが漂っている。一八〇〇円の値札を見ながら、「これ幾らにしてくれる？」「残り二杯だから八〇〇円！」といった調子で、ウニトロ丼を買って、その場で食べる。

「オーナーの息子さん？」「そう。長男」などと会話する。

少し奥へ行くと、サザエを殻ごと煮ている。帰りの船内で焼酎のアテに買う。

「十個八〇〇円でどう？」「袋のより、鍋の残りがいい。三人で分けるから、十二個入れといてよ」と値切る。お目当てのフグの一夜干しの店で、

「女将さん？　少し引いてよ」と言うと、相手もうまいもので、「私、嫁なんで、値段のことは無理です」と逃げられた。仕方なく六匹八〇〇円の包みを買う。土産物店では八匹一五〇〇円だった品だ。

明るい日が射し始めた唐戸桟橋から関門連絡船に乗って再び門司へ。船内に靴の脱げる場所があったので、そこに数人で坐った。波はおだやかである。

対岸で船を下りて少し歩くと、JR門司港駅前に出る。駅舎はなかなか風情があるので写真に撮る。さらに門司港遊覧船乗り場へ行くと、「門司港レトロ地区」になっていて、懐かしいような大正期風の石造りビルが辺りに建っている。観光名所にしようと、美しいレトロな街区にしよ

うという意気込みが好もしかった。

オプションの遊覧船では、寒いデッキから眺めた西日の当たる関門大橋と港湾の倉庫列だけ印象に残った。

観光バスが発車するまでの間、私達は土産物街の居酒屋に入り、鯨のベーコンでビールを呑んで時間を費やし、お土産に「九州ラーメン」を買った。近くの店で、

「フグの一夜干しは、焼くより、バターで炒めた方が美味いよ」

と教わった。

この旅で忘れられないのは、下関が門司より西に位置するということだ。実は、歩いていても、下関にいるのやら門司にいるのやら判然としないことが多かったのである。

帰りのフェリーは二〇時発。近くで暮らす松原さんの妹さんが新門司港で私達のバスを待っていて、出発まで船内で雑談した。

翌朝は六時に起き、船で一風呂浴び、明け初めた明石海峡大橋を見上げる。淡路島の燈火も見える。快晴である。

朝八時、大阪南港に到着。明るい日射しが三六時間にわたる小旅行の無事を祝っているようだった。

（おわり）

門司港レトロ地区の建築物

介護日記

◆母が脳梗塞で倒れました。

今回は、覚悟して喪服も用意しました。けれど、神様（ご先祖様）は母を守ってくれました。今は言葉が不自由ですが、リハビリで回復しそうです。母の最初の言葉が、「かんべんね、かんべんね」でした。

台所でハイターで籠をきれいにしようとしていて倒れたのです。その日は戻り寒波で、雪が降っていました。脳梗塞が出て、ハイターの液を被り、着物がびっしょりでした。倒れたとき、どこかにぶつかり、額と足を切ってあちこち血がこびりついていました。

戦時中は一人で田畑を守り、子供時代もいろいろ苦労の多かった母を、一日でも長く、笑顔で過ごすことができるようにさせたいと思っています。

◆こちら新潟は、13日・14日は雪が降りしきり、夜は白の世界に建物の明かりがクリスマスのイルミネーションのように美しく映えあがりました。病院の中から外を見ていると、幻想的でさえあります。

母は必死で喋ろうとするのですが、うまく言えません。でも、高崎から孫娘が来ると涙を流して喜びました。

◆妹は、もう3夜も母のベッド脇で介護してくれました。不眠症のわたしは、昼だけです。周りの刺激によって、回復が大きく違ってくるので、むりなくできることをしていこうと思います。リハビリも15日から始まりました。言語と手と足の3人のリハビリ師がついてくれます。とても優しいです。リハビリの途中、母が言いました。「おしっこが出ちゃった！」

リハビリ師さんが、「じゃあ、もうやめましょうかね」と言うと、母は「これくらいなんともないから、つづける」と答えました。母の必死なやる気を見ていると、とても嬉しくありがたい気持ちになります。（ユ）

小田原で聴いた モーツァルトの『レクイエム』（二）

瀧本文彦

晩年、モーツァルトは借金を申し込む手紙をフリーメーソンの盟友プックベルクへ数多く書き送っている。

――落ち着いて作曲できるためには６００フローリンが必要です。――

しかし、１５０フローリンしか受け取れなかった。

――ただもう金を手に入れたいばっかりに骨の折れる仕事、弦楽四重奏曲を二束三文で手放すのはつらい。――

と手紙に書く。

モーツァルトの死んだとき、その葬列の費用が８フローリン余り、霊柩車の費用は３フローリンだった。貧しい中で死んだモーツァルトは他の貧しい人々と同じように埋葬された。遺体は共同墓地に埋められたが、その場所は不明である。十字架さえ立てられることはなかったという。

モーツァルトの『レクイエム』を聴くたびに、彼の報われることの少なかった生涯を思い、僕は目頭が熱くなる。しかし、彼の音楽は軽やかに澄んでいて高邁――悲劇的な箇所でも悲惨さは感じられない。だから強い感銘を受けるのである。

神奈川フィルのイントロダクションを聴くなり、モーツァルトの晩年を思い、胸が痛んだ。今に涙がこぼれては恥ずかしいと、そっとズボンのポケットからハンカチを取り出して膝に置いた。

聴き進むうちに、音楽の崇高さと力強さに感動が昂まった。これが瀕死の状態で作曲し、完成させることもなく、力つきたモーツァルトの『レクイエム』か、と。

弦楽器の音の包み込むような柔らかさ、弦と弓とが接触する時の力強さ、トロンボーンの炸裂するような音――これらはナマ演奏でしか聴けない。ＣＤで聴いたのと落差が余りにも大きかった。

合唱団は男性五〇名くらい、女性一〇〇名くらいで、クレッシェンドしてffになると、これだけの人数による合唱の迫力は圧倒的だ。オーケストラの音もかすんでしまう。

演奏会の帰り、息子に、

「どうだった？」

と聞いた。

「一カ所、知っている音楽があった。『怒りの日』という曲だ」

と言う。

「どこで聴いたのだ？」

と問うと、

「テレビ・ゲームの音楽だ」

と答えた。ゲーム屋のミュージシャンは何でも貪欲に取り入れるのだな、と驚いた。

小田原の街を息子と歩いた。僕は小田原の街を歩くのは初めてだった。

「おいしい梅茶を売っている店がある」

と言うので、しばらく歩き、その店を見つけた。梅茶を息子は二ケース買った。僕は一ケース買った。

店の人が梅茶をコップに淹れて、

「さあどうぞ、お飲みになって下さい」

と出してくれた。椅子に腰掛けて息子と梅茶を飲みながら、モーツァルトの『レクイエム』とモーツァルトの生涯を思い返した。

遙かなる戦火

内田幸彦

男は二十歳になれば二年間は軍務に服さねばならない義務があり、これを現役と称し、それが終わると帰郷――予備役となった。

日清戦争・日露戦争・日中戦争（日支事変）・太平洋戦争（大東亜戦争）と軍部は武士道精神を重んじた時代で、《男女七歳にして席を同じくせず》式の教育を受けていたから、男女交際も自由ではなかった。当時、女学生と歩こうものなら周りは羨望と嫉妬にかられ、

「男と女と仲チンチン」

と冷やかしたもので、男女の仲は罪悪視する傾向さえあった。そんな時代に、安価に欲望を満たしてくれる遊廓は男には重宝だった。

兵隊検査を受け、半年以内に入隊通知書受け取り、指定の連隊に入隊する。その前夜は遊廓で青春を楽しみ、ここから出征する者もいた。入隊すれば生きて帰れる保証はない。せめて人生の喜び位は味わっておきたい、というのは人情であろう。

一九五六年（昭和31）の売春禁止法により、遊廓は一斉に姿を消したが、庶民のセックスの捌け口がなくなり、地下に潜った売春は料金が高騰し、性病の感染度も高くなってしまった。

現代の性犯罪の多いことに驚く。幼児誘拐殺人、ロリコンによる性犯罪は世間を騒然とさせている。庶民に適当なセックス処理の場がない結果だ。遊廓がなくなり、遊興費が闇値で、庶民には手の届かない高さになったこと、戦後の男女同権で女性上位となり、男性は弱体化してセックスも儘ならないことが指摘できる。ひいては少子化現象にも繋がっている。

遊女達は性犯罪の防波堤の役目を果たしていた、と私は思う。女性の人権侵害という観点から遊廓の廃止となったのだろうが、物事には表裏がある。もし今も遊廓があれば、幼児誘拐その他の性犯罪はもっと少なくて済んだかもしれない。

昔の庶民は貧乏だった。しかし、心は豊かで、義理も人情も弁えていた。今は金があっても、自分のことしか考えなくなった。日本人の思考も生き方もプライドも変わってしまった。新しいものが良いとは限らない。

（一三）遊　廓

遊廓といっても、なくなって早五十年になるから、知らない人も多く、死語となってしまった。かつて遊廓は庶民の安価なセックスの捌け口の場として人気があった。

夜の帳（とばり）が下りると、軒を連ねた遊廓は、赤・青・黄の色ガラスが燈火に輝き、強い脂粉の香が男心を弾ませた。夜中まで遊蕩気分のさんざめく男のための世界だった。

記憶も定かではないが、一九四五年（昭和20）頃で、一時間（正味は四十分ほど）の値が今の千円位だった。泊まりの料金でも三千円前後だったと思う。その上、遊女たちは性病の定期検診を受けていたので、その心配も少なく、安心だった。

ヒカル君の冒険　１１

藤川博樹

ヒカル君の二回目の引っ越し

ヒカル君が五歳のとき、また引っ越すことになった。

大人たちは朝から引っ越しの準備をしている。ヒカル君は七五三用の一張羅のスーツを着せられて、家の前に立っていた。引っ越しの準備が終わったら、ただトラックに乗るだけでいいように、朝早くからこの格好をして、家の外で立っていたのだ。家の南の路地の向こう側に、マナブちゃんの家の裏木戸が見えていた。マナブちゃんの家の北側は木の塀が打ちつけられていて、家の中は見えない。その塀の模様をずっと見ていた。

ヒカル君は二年前の引っ越しのことをほとんど覚えていなかったが、今度の引っ越しは、自分がこれから遠いところに行ってしまうのだということがよく分かった。自分の住んでいた家にはもう住めないということ、別のどこか遠いところにいくのだということ。一緒にあそんだエツローちゃんや、ハルオちゃんとはもう会えないのだということがわかった。

ヒカル君の弟はもう二歳半になっていたが、家のまわりや大人たちのただならぬ雰囲気を感じたらしく「いくのいやだ、ここがぼくのうちだ」といって、朝からずっと泣き続けていた。

ヒカル君にはそれらのことが頭ではよく分かったが、心のそこからは納得できないでいた。ヒカル君の世界は大きく破れようとしていて、ヒカル君はそのつらさに必死に耐えていた。もう友達には会えないということ、もうこの家には住めないのだということ、そのことをヒカル君は感じていた。自分の家の門の前に長い時間立って、マナブちゃんの家の裏木戸と、木の塀の模様を眺めながら、自分は今日の日のことをずっと覚えているだろうと思った。

ヒカル君は、その日、自分を見ている自分を初めて感じた。自分の家の門の脇に立つ、ジャケットを着た自分の姿と不安そうな表情をした自分の姿が、ヒカル君には見えた。

引っ越しの準備を終えたトラックは、産業道路を南に向かってどんどん走って行った。

しばらくしてトラックが止まった。運転席の真ん中に座っていたヒカル君が振り返ると、荷台にいたお父さんが、運転席の後部の小窓から合図していた。トラックに積み上げた荷物のてっぺんにあった自転車が道路に落ちたのだ。大人たちが降りて、ふたたび自転車を縛りつけた。お父さんはふたたび荷物のてっぺんに登って、走っている間中必死に荷物を抱き留めていた。

ヒカル君には長いとも短いとも感じた時間が、ただただ夢のような時間が過ぎた。トラックは埼玉から東京に入り、産業道路から環七通りをすぎ、大森駅前の乾物屋の角を曲がって、駅前大通りを左折した。そして大森貝塚前のアパートに到着した。

アパートは、できたばかりの新品で、ヒカル君にはただもうすべてのものが目新しかった。トイレの水を流すと、ごうごうとすごい音がして、いつまでも鳴りやまなかった。いつまでも水が止まらないのでお母さんもとても不安で、ヒカル君はお母さんの脇に立って、二人で水がいつ止まるのだろうと心配して見ていた。水が止まるまでには長い長い時間がかかった。

ヒカル君は家の外に出てみた。しばらくして自分の家に帰ろうとして、どこが自分の家かわからなくなって泣いていると、お母さんが出てきて、家の扉の二十八番の番号を指して、この番号が自分のうちなんだと教えてくれた。黄色い扉と黒い扉、同じ形の扉がいくつもいくつも続いていて、野原や山や林、路地や池や田んぼに囲まれて育った今までの家しか知らなかったヒカル君には区別がつかなかった。

ヒカル君の弟が、お母さんにくっついて、「ねえ、早くおうちに帰ろうよ」と言った。ヒカル君は、お兄さんらしく「ここが、新しい家なんだよ。だからずっとここにすむんだよ」と言った。だけど、ヒカル君の心の中にはとても割り切れない不安な気持ちが長く残ったんだ。（ヒカル君の冒険・第一部完）